

発行日 2010.10.31

編集発行人 重富克彦

時は縮まっている。

1Cor7:21

Kairos

事務所所在地 064-0912 札幌市中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

「わたしは ここに立っている」

16世紀のルターから21世紀の日本のわたしたちへ

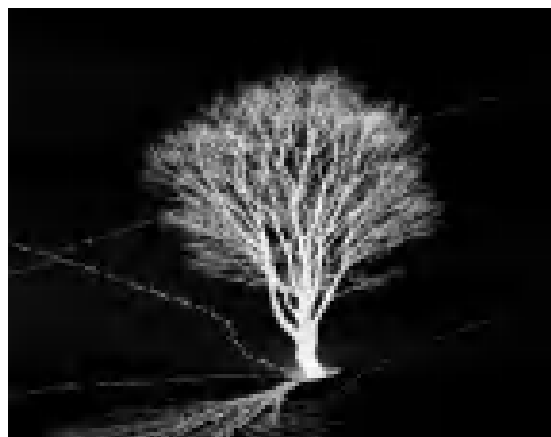
マルチン・ルターがヴイッテンベルグの城教会の扉に、95箇条からなる、提題(ローマ法皇に対する意見書)を貼りだしてから3年半後の1521年4月、神聖ローマ帝国皇帝カール五世によって、彼はヴォルムス帝国議会に召喚された。この3年半の間に、宗教改革の炎は一挙に広がっていったのだ。

その議会で、尋問を受けるために立った机の前には、彼の著作がずらりと並べられていた。尋問は二つ。一つは、その著作が全部、彼のものであるかということ。もう一つは、そこに書かれている彼の考えを撤回する意思があるかということだった。

第一の尋問には躊躇無く答えたものの、第二の尋問には、即答をすることが出来ず、一日の猶予を願った。そこで一貫して主張していることは、「人の救いは、行いによらず、信仰による」という、聖書から再発見した真理であり、その真理に立って、当時のカトリックの有様を批判したものだからだ。

なぜ彼は、返答に一日の猶予を願ったのだろうか。彼の返答次第では、ドイ

ツを始め、ヨーロッパ全体がますます宗教的、政治的な混乱の増埒となり、抜差しならぬ事態に至ることは目に見えていた。何より彼を苦しめたのは、今まで、ヨーロッパを連綿と支配し、純朴な大衆が、疑いもなく信じてきたカトリックの体制が根本的に間違っていて、自分だけが正しいなどということが



あるり得るのだろうかという自問であったという。

しかし彼は翌日、自説を撤回することなく「わたしは、ここに立っている」と返答した。正確に言えば「聖書に書かれていないことを認めるわけにはいかない。わたしは、ここに立っている。それ

以上のことは出来ない。神よ、助けたまえ」という言葉だったという。

「わたしはここに立っている。」この言葉は、現代の日本というまったく違った状況の中にいるわたしたちに対して、まったく異なった文脈の中で、あらためて強く語りかけるものがある。

無縁死や、高齢者の大量の消息不明者の存在が露出させてくれた現実には、従来の日本人の生き方が、限界に達し、崩壊しつつあることだ。その生き方とは、孤独を恐れ、自分を出さないことを美德とし、空気を読むことに神経をすり減らし、たがいに同質であることを限りなくもとめ、「わたし」を隠してもたれ合ってきた生き方だった。無縁死や不明の人たちは、空気を読むことに疲れ果て、孤立を選んだ人たちか、あるいは、周囲からはじき出され、忘れられた人たちである。

空気を読むことに神経をすり減らすのでなく、「あなたはどこに立つのか」、「ひとりひとりの人生の座標軸は、どこにあるのか」、これは今の時代のわたしたちへのルターからの問いかけでもある。(重富)

教会の活動

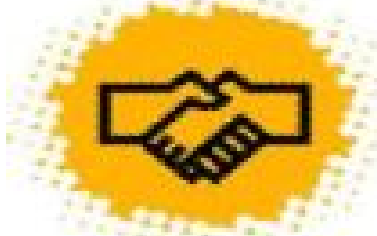
10月31日・宗教改革記念日

ルーテル・カトリック「共同宣言」の後

1999年10月31日、ドイツのアウグスブルグに於いて、ローマカトリック教会と、ルーテル世界連盟との間で「義認の教理に関する共同宣言」が発表された。教皇庁のキリスト教一致推進評議会議長ヴァルター・カスパー枢機卿は、日本語版への序文に「この同意は同時に、義認に関連して16世紀に向け合った互いの断罪がこの共同宣言に示されたルーテルとカトリックとの理解には適用されないことを宣言する」と述べている。

ルーテルとカトリックとが完全に一致したと言うにはまだ道のりがあるものの、少なくとも、「人は、行いによってではなく、信仰によってのみ救われる」というプロテスタントの大前提となっている信仰理解についてのカトリックとの間の溝は、この共同宣言によってほぼ解消されたのだ。そうすると、わたしたちが、宗教改革記念の礼拝をことあらためて持つことにどんな意味があるのか、もういちど問い直してみる必要も出てくる。

そこで最も大切なことは、ルターが「わたしはここに立つ」と言ったとき



の「わたし」のあり方を、対カトリックを越えて、普遍的な人間のあり方の中で、受け取直すことだろう。現代人は(特に現代の日本人は)、我(ガ)は強いものの、ほんとうの「わたし」を見失って右往左往しているからだ。

召天者記念礼拝

11月6(土)7(日)

11月の第1週の主日には、毎年召天者記念礼拝が持たれる。今年は札幌北礼拝堂では、11月6日、札幌礼拝堂、新札幌礼拝堂では、11月7日となる。この礼拝は、11月1日の全聖徒の日になみ、それに最も近い主日が全聖徒主日と定められていることに由来する。

わたしたちの信仰は、たえず未来を望みながらの信仰だ。希望は、信仰の要である。けれど、その未来は、絶えざる過去の想起を通して現在と出会い、その中で未来に確信を与えられるというものである。希望はただの願望ではない。

過去の聖書を通して、現在のキリストに会い、その出会いの中で、未来への確信を持つのはその故である。

召天者を想起するとき、わたしたちは、その方々が間近にいてくれることを感じるだろう。そればかりか、その方々が、わたしたちの未来の証人でもあってくれることを確信するだろう。その確信の度合は、生前の愛の確かさの度合にも比例するだろう。

子ども祝福式

11月13(土)14(日)

今年の子どもの祝福礼拝は、13日(札幌北)14日(札幌、新札幌)、各礼拝堂で持たれる。札幌礼拝堂では、教会学校の生徒たちや、めばえ幼稚園の園児たちが、保護者と共に参加し、その日は、子どもたちの若々しい命が会堂いっぱい溢れる。礼拝者たちも皆、心から、この子どもたち一人一人の生涯が、神さまの導きの中にあるように、祈らずにはおれない。

めばえ幼稚園

成長を感謝

10月26日、初雪が降った。降っただけではなく、7センチも積った。でもこのまま冬になるわけではない。11月8日には、中島公園まで歩いて、イチョウの葉っぱと遊ぶという大事な行事があるのだ。その時はきっと、小春日和のあたたかいひざしが、子どもた

ちをつつんでくれるに違いない。

4月に入園してきた一番小さな子どもたちも、七ヶ月過ぎると、ずいぶん体も成長した。もうすぐ初めてのクリスマス。年長組は幼稚園最後のクリスマス。クリスマス劇の練習も始まる。長い劇だけどみんなちゃんとおぼえる。

11月14日(日)は、成長を感謝して教会の祝福式に出よう。神さまの祝福を受けて、もっと成長しよう。



輪廻と復活

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

詩編23:1

「もし生れ変わるとしたら、今度はどんなお仕事をしたいですか」「今度生れ変わるとしても、今の奥さんと結婚しますか」などは、何かのパーティーの席で、司会者が場を盛り上げるために、その主人公に、よくする質問でもある。

もちろん、背景には輪廻の思想があるわけだが、それほど意識されているわけではない。けれど、ある意味では、特別に意識されないほどに、それは、わたしたちの思考を支配しているとも言える。

輪廻の思想は、ヒンズー教から、仏教に色濃く受継がれている。それは自然の生態系からも類推できて、合理的ですらある。木の葉は大地に落ち、肥沃な土となる。肥沃な土は、植物を育て、動物を養い、動物もまた土となり、新しい植物を育て、新しい命を育てる。このような生態系の輪廻は、わたしたちの生存の環境の全体に行き渡っている。万物は流転するのだ。そのような現実から、わたしたちの命の流転を、輪廻という円環の中で理解しようとする思想が生れてきたのも当然の成行きだろう。

チベット仏教で、「生き仏」の生れ変わりが、チベットの最高宗教指導者として、連綿と出現すると信じられていることは、よく知られている。ダライ・ラマやパンチェン・ラマと呼ばれる人がそれである。ダライ・ラマは宗教指導者だけでなく、政治的な最高指導者でもある。現在のダライ・ラマ14世は、中国政府の迫害を逃れて亡命政府をつくって活動を続けている。

この地位は、選挙や、世襲によるものではなく、チベット政府が、お告げを受けて捜索し、仏の化身として認定した少年になる。神秘的だ。

生れ変わりのというのは、当然、前世

の存在を前提する。この前世についても、仏教本来の教えとは、多分、大きくずれているのだと思うが、今風にスピリチュアルカウンセラーなどと自称している占い師や、霊媒師が好んで用いる概念でもあるようだ。今の不幸を、あるいは幸福を「前世の因縁」と理解すれば、不幸なときには、それを引受けるしかないというあきらめにもなり、幸福なときには、その幸福を更に深く味わえることになる。たとえば、恋人同士が、「わたしたちは前世でもきっと夫婦だったのね」となどという睦言として。

キリスト教には輪廻の思想はない。バプテスマのヨハネのことを、民衆が



エリヤの生れ変わりと噂していたという記事はあるが、それは輪廻ではなく再臨の思想に近い。

言うまでもなく、キリスト教の根幹にあるのは復活信仰である。「人の命は、この世で終るものではない」ということでは、輪廻の思想と共通しているが、それを円環として理解するか、超越的な時空への飛翔として理解するかでは、おおきく違う。けれど、輪廻を解脱して、浄土に成仏するというときには、やはり、超越的な時空への飛翔がイメージされているのだろうか。ひたすら念仏し、阿弥陀仏におすがりして浄土に行こうと訴える親鸞の教えに、わたしが強い親和性を感じさせられるのも、そのゆえかも知れ

ない。親鸞の言う浄土は、イエスの教えられる「神の国」と、殆ど同じようにさえ、わたしには思える。

復活信仰が、輪廻思想と決定的に違うのは、復活信仰が、イエス・キリストの復活という歴史的、で1回限りの出来事に基づいているということである。「弟子たちの心に、いつしか、イエスが甦り、次第に復活信仰として確立されてきた」等というものではない。

「最も大切なこととして、わたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと。葬られたこと。

また聖書に書いてあるとおり、3日目に復活したこと。ケファに表れ、その後12人に現れたことです。ついで500人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かはすでに眠りについたらにしろ、大部分は今なおお生残っています」(1コリ15:3-6)

パウロもまたこのようにキリストの復活の歴史的な事実性を強調している。たしかにこれはまことに不合理なことであり、今と

なっては検証不能だ。けれどその障害を越えて心の目を開き、信仰へと導く力が、聖霊の働きであり、それによって、全世界に広がる22億の人々が、復活と永遠の命を信じているのである。

今ひとつ、輪廻の思想と、復活信仰が根本的に違うのは、人格の一貫性ということである。これは大事な点だ。「肉の体でまかれ、霊の体に蘇る」とパウロは言う。霊の体である以上、その体の組織も、構成要素も全く異なるはずである。けれども、その人格の一貫性は変わらない。わたしはわたしだ。自意識の一貫性も変わらない。わたしはわたしである。(重富)

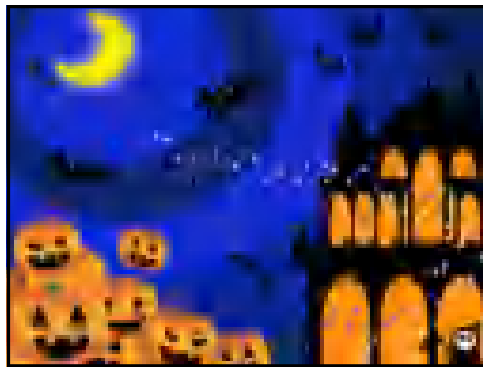
< 宗教改革記念日と

ハロウィーン>

近所の大型スーパーマーケットの売り場の一角に、10月に入っただけで「ハロウィーン・グッズ」のコーナーが設けられ、キャンディーやプラスチック製のカボチャ提灯や仮装用のマスクなどが並んでいる。私は、1992年10月にアメリカのルイジアナ州で起こったハロウィーン・パーティーにからんだ日本人留学生射殺事件以来、「ハロウィーン」をキリスト教まがいの俗悪な習俗と思うようになった。半世紀も前の昔のことであるが、私と妻は米国カリフォルニア州のバークレイという大学町に2年近く暮らしていた。「テンセント・ストア」と呼ばれる、いつもポップコーンと飴の匂いが漂っている当時10セント均一の安物商品を売る店で、10月になるとハロウィーン・グッズが並んでいたのを思い出した。妻が英語学校の先生から、10月31日の夜はハロウィーンで、お化けや魔女などの格好をした子供たちが「お菓子をくれないといたずらをするぞtrick or treat」と言って家を訪ねてくるからキャンディーを用意しておくとい、という情報を得てきた。最初の年は、興味もあったので、キャンディーを用意して子供たちの訪問を待っていた。私たちは、家賃の関係で、アフリカ系アメリカ人の居住区にアパートを借りて住んでいた。夜、白いシーツや毛布に身を包んでお化けになったつもりの近所の子供たちが数人「ハ

ロウィーン！」と言って訪ねてきた。小さな妖怪たちの黒い顔と頭を覆った白い布のコントラストと、キャンディーを見てきらりと光った眼は、恐ろしくはなく、むしろ滑稽で可愛かった。ハロウィーンは一度経験したので、次の年の10月31日の夜は、お化けが来ないようにアパートの部屋の電気を消して、客員として所属していたルーテル教会へ行き、宗教改革記念日の夜の集会に出席した。秋の夜の

ヨーロッパの民衆文化とキリスト教の中の民間信



バークレイの街を歩きながら、ルーテル教会では「宗教改革」を記念する礼拝、街中では「ハロウィーン」の民俗という取り合わせの奇妙さに思いを巡らせた。1517年マルチン・ルターが、ヴィッテンブルグの城教会の門扉に免罪符販売の疑義をただす95箇条の論題を貼付するにあたって、

10月31日の夜を選んだのは、翌日の11月1日がカトリックの「諸聖人の祝日（万聖節）」であるので、普段よりも多く教会に来ると予想される大勢の人々に問題提起を知ってもらうためであった。ヨーロッパにはハロウィーンは、紀元前の数世紀間ヨーロッパの中央部に居住していたケルト民族のドルイド教（Druidism）という異教の残滓である。ドルイド教は、靈魂の不滅と輪廻転生を信じ、死の神を世界の主宰者とする。ケルト族は、11月1日を一年の始まりとし、Samhainと呼んだ。その前日

の10月31日はドルイド教の「死者の日」であり、その夜は、死者たちの霊がさまざまな妖怪じみた姿をとってこの世に帰ってくる、と

信じられた。ケルト族は、紀元後ゲルマン民族とロマンス語系民族の新興勢力に押しやられてヨーロッパの北西海岸に移動し、さらに海を渡ってスコットランドやアイルランドなどの島々に移住した。ケルト族がヨーロッパの中央部から去った後も、10月末日に死者の霊がこの世に帰還するというケルト異教の俗信は民間に留まった。その異教信仰を排除するために731年にローマ教皇グレゴリウス 世が、それまで5月13日に行われていた「諸聖人の祝日」を11月1日に移動させた。ハロウィーンはヨーロッパからは消えたが、ケルト系のアイルランド人移民によってアメリカに持ち込まれ、後に英国等に逆輸入された。

日本福音ルーテル札幌教会 牧師 重富克彦 岡田 薫

札幌教会 URL <http://www.jelc.or.jp/sapporo>

札幌礼拝堂 064-0912 中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

札幌北礼拝堂 001-0031 北区北31条西4丁目1-5 011-726-3243

新札幌礼拝堂 004-0053 厚別区厚別中央3条6-1-5 011-891-5246

めばえ幼稚園

園児募集！

11月1日 願書受付開始